

中

世

川原阿弥陀来迎三尊供養塔（三神）



一、中世の矢吹

1

中世を通じておよそ矢吹町の地域は、西部の大和久などを除く大部分が石川庄の範囲に含まれ、石川庄の領主であった石川氏の支配下におかれた。

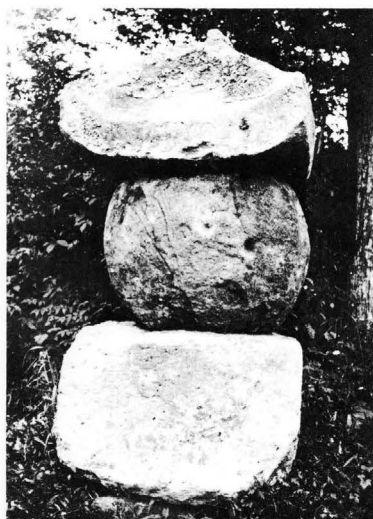
石川氏は清和源氏。その祖有光は十一世紀なかごろ、父頼遠と共に源頼義、義家に従って前九年の役に参加し、その功によって現在の石川郡地方を与えられ、康平六年（一〇六三）、当時藤田郷とよばれた現在の玉川村の地に住んだと伝えられる。有光は、この戦に討死した父の菩提のために岩法寺を建立し、子息有祐を氏神川辺八幡社の祭祀にあたらせ、またのちに、石川郷に三蘆城を築いてここに移ったという。石川系図は、有光がはじめ摂津国物津に住み、のち源義家の代官として仙道七郡の主となったと述べている。仙道七郡というのはこの場合、白河・石川・岩瀬・田村・安積・安達・信夫をさすものであろうか。なお『義経記』には、源頼義が「白川の関を越え、ゆきかたの原に馳付き、貞任を攻む、

貞任其日の軍に打負て、安積の沼へ引退く」とあり、前九年の役の両軍の戦場が「行方野原」とよばれた矢吹町東部でも行われたことを伝えている。すでに平安時代に石川庄に米住した石川氏は、矢吹地方にも支配の手をのびした。承元三年（一一〇九）、

石川一族の石川坂地光盛は、嫡子光安（光重）に坂路・千石など九カ村を譲ったが、そのなかに堤村と給当村がみえる（赤坂文書。堤村はいまでもなく矢吹町東部の堤であり、給当はそれに近い久当山のあたりである。承元三年は鎌倉時代の初期であるから、おそらく平安時代から、堤・給当は石川氏の領地であったものと思われる。おそらく、この二カ

村以外の矢吹町の地域の大部分が、このころには石川氏の支配下に入っていたものであろう。

けれども、矢吹町の地域がすべて石川氏の独占下にあったのではない。鎌倉末期の文保二年（一一三二）の文書には、結城盛広が富沢・真角・葉太などの十カ村とあわせて大和久を所領としていたことが記されている（結城文書）。後述する文禄四年（一五九五）の『蒲生領高目録』では三城目と大和久が白河郡の内となっていたとみてよからう。結城盛広は下総国結城（茨城県結城市）の領主結城広綱の次男で、白河郡北方を所



石川有光の子石川基光の墓 石川郡玉川村

治承5年(1181)とある。重要文化財



石川城跡(三芦城)
石川郡石川町





久 当 山 矢吹町三城目地内
急当村のあったところと考えられる。

観応三年八月三日足利尊氏袖判吉良貞家奉書

石川郡玉川村 川辺八幡神社文書



領として富沢に住んだ人物である。これに對して、広綱の弟祐広は白河に本拠を置いて、結城白川氏の開祖となり、白河郡南方を所領としたのである。

なお鎌倉時代に矢吹町地方の周囲にあった勢力は、結城白川氏のほかに岩瀬郡の二階堂氏、安積郡の伊東氏、会津の蔵名氏、田村郡の田村氏、岩城郡の岩城氏、行方郡（相馬郡にほぼ相当）の相馬氏、さらに伊達郡の伊達氏で、このような勢力配置は大体戦国時代のころまで持続している。

2

「建武新政」にあたって奥州に下向した陸奥守（のち兼鎮守府將軍）北畠顯家は、建武元年（一三三四）四月六日、石川庄中畠・松崎を結城宗広（祐広の子）の長男親朝に与え、翌年十月には、白河・高野・岩瀬・安積郡および依上・小野保とあわせて、石河庄の検斷（軍事警察権）を奉行するように命じた。

「建武新政」は早くも建武二年の十月には破れるが、その翌三年七月、石河義光の若党である屋基弥平一頼道という武士が、主君の戦を報告し、その軍忠に對する足利尊氏の証判を執事高師直に申請した文書がある（石川文書。これによれば、主君義光に従つて西上し、一旦は九州にまで下り、のち湊川合戦に参加している頼道は、その苗字と通称からみて、矢吹を本拠とした平姓の士であったことが明らかである）。

観応二年（一三五二）五月には、石川中畠孫四郎が北朝方から出陣命令を受けている。孫四郎は中畠領主、石川一族であることは確

貞治六年八月二十五日

足利義詮感状

(津市 結城神社文書)



行方原（矢吹ヶ原）のおもかげ

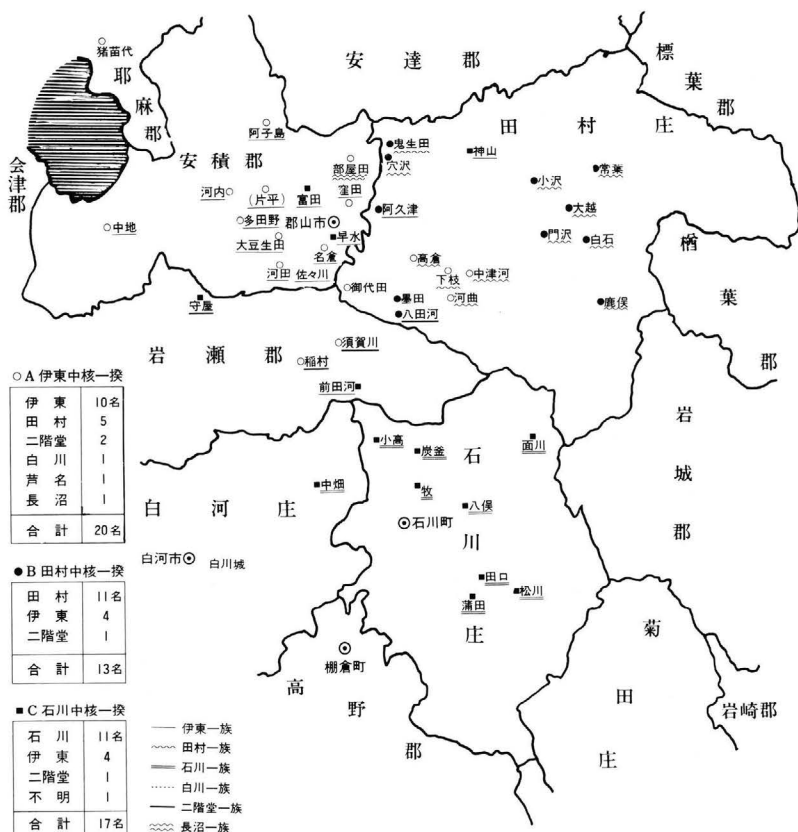
実である。「建武新政」の一時期、結城白川氏に与えられた中晶村は、ふたたび石川一族の手に落ちたのである。翌観応三年には、奥州管領吉良貞家が尊氏の命令を奉じて、石川板橋高光に板橋・千石以下、急当、沢尻村などを安堵している。この沢尻は石川町の沢尻かと思われるが、急当は前述した矢吹町の久当山の地である。

なお、南北朝後期の貞治六年（一三六七）七月には、結城小峯朝常・長沼淡路五郎らが吉良貞家の子治家と石河庄行方野で戦い、將軍足利義詮から感状を受けている（結城神社文書・皆川文書）。行方野は前述のように矢吹町東部、三城目から中晶・滑津にわたる原野の旧名である。

3

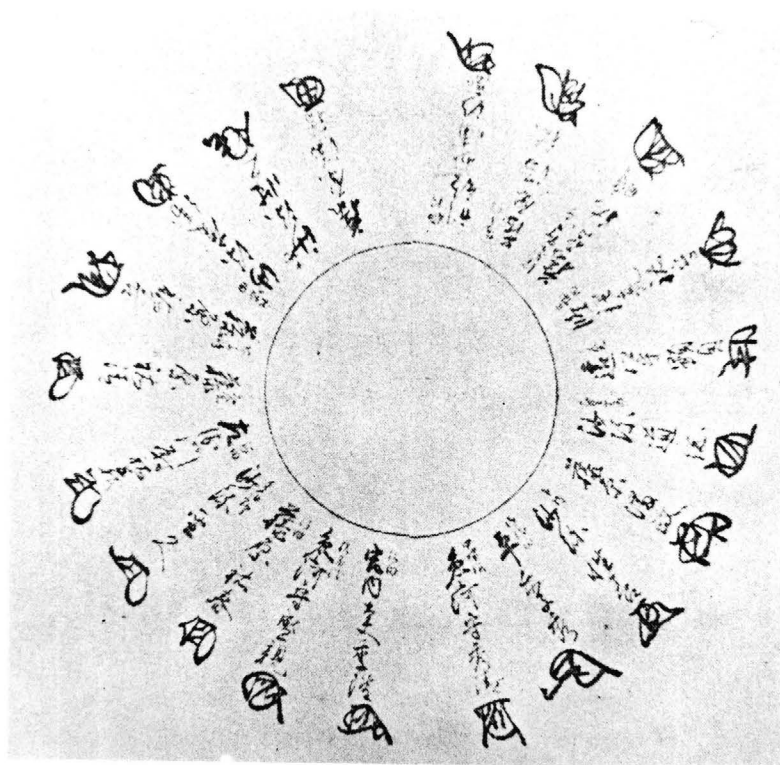
十五世紀初頭の応永十一年（一四〇四）の頃、石川蒲田長門守光重、石川松川朝光ら一七人の中小領主が、攻守同盟の一揆契約を行った。そのなかに「中晶上野介師光」がみえる。師光はおそらく石川一族であろう。この一揆の面々は、古殿町を含む石川庄から須賀川・郡山市に及ぶ範囲にわたり、伊東・田村・白川・二階堂・長沼の諸氏の一族とみられるものが加わっているが、多くは石川氏である。これとおなじころ、田村一族を中心とする一三名の一揆契約が行われ、また応永十一年七月には、伊東一族を中心とする二〇名の一揆契約が行われた。三つの一揆はほぼ同時期に、石川・田村・安積の郡とその一族を中心として結成されながらも、さらに岩瀬二階堂および白河白川の両郡両氏の一族をも交え、各部

仙道一揆参加国人の所在





観音山館（根宿）



仙道国人一揆契状

応永11年7月 結城文書

各氏にわたりながら、相互に入りくむ形を採っている。

血縁的な惣領中心による一族の結合形態は、南北朝動乱の過程で崩壊し、非血縁的地縁的な横の結合が出現したのである。

なお、正長元年（一四二八）十二月、笹川御所足利満直は、幕府と関東府との緊張のなかで、鎌倉御所足利持氏に党して討死した石川駿河守の遺領を、結城白川氏朝に与えたが、その遺領のうち「野吹」が除かれている。当時矢吹は、明らかに石川領だったのである。

十五世紀末の文明の頃、結城白川の勢力は南奥羽から北関東にまで及



中畠晴辰の墓 三城目字根岸地内

び、石川氏もこの風下に立つたと思われるが、十六世紀奥羽の戦国時代の展開のなかで、石川氏は田村・蘆名・二階堂・白川の諸氏との抗争連合をくり返しながら、矢吹町を含む石川庄のうちの中小領主に対する従属を強めていった。そのなかで、中小領主もまた相互の抗争を続ける。

十六世紀末の頃、中畠館主であった中畠上野介晴辰は、三城目の高梨館主伊藤を滅してこれを収めたと伝える。そしてこの晴辰も、また矢吹館主屋基薩摩守とともに石川昭光の有力な麾下として活躍するのである。

ただし、三城目の御霊宮の別当東光院（景政寺）の文書によれば、三城

目は天正年間に白川氏に属していたとみられる。文録の「高目録」にこれが白河郡に含まれているのは、その事実を示すものかと思われる。

戦国末期、矢吹町の地は石川氏もろとも佐竹義重の勢力下に編入され、天正十七年（一五八九）、伊達政宗が

義重の子蘆名義広を大敗させて会津地方を収めて、石川昭光が政宗に従属するに至って、伊達氏の勢力下に入ったが、翌十八年、豊臣秀吉の「奥羽仕置」の結果、蒲生氏郷の所領に編入され、矢吹の中世は終幕するのである。

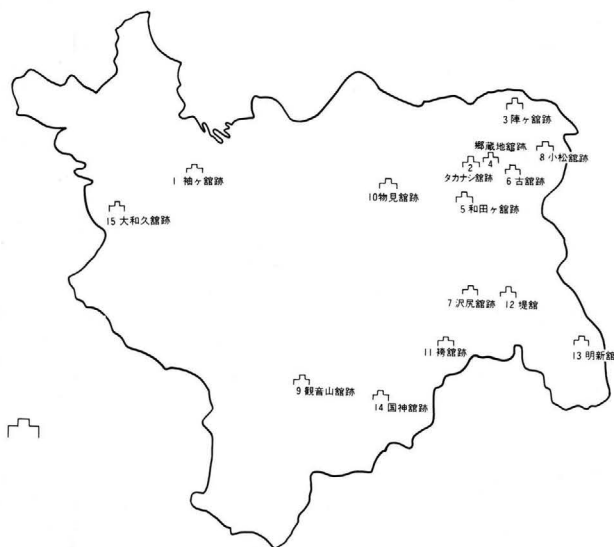
天正17年12月27日 東光院宛伊達政宗書状

東光院（三城目にある景政寺のこと）



二、矢吹の館跡

主なる中世館跡所在地図



・古館・中世館跡・国神館跡・明神館跡・陣ヶ館跡・袖ヶ館跡・大和久館跡・物見館跡・和田ヶ館跡・堤館跡・須乗字館跡・中畑大字大畑・西畑・東畑・矢吹

矢吹の主なる館跡地名表

番号	名称	所在地	地目	備考
15	大和久館	大和久字堰ノ上	山林	48・4・1町指定史跡
14	国神館	中畑字国神	畑	
13	明神館	明新字館山	山林	
12	堤館	堤字館山	山林	
11	物見館	須乗字館山	山林	西袴館ともいう
10	観音山館	中畑字根宿	山林	五四・七ヘクタール
9	小松館	〃 字川原	山林	四四・七ヘクタール
8	沢尻館	〃 字沢尻	山林	東袴館ともいう
7	古館	〃 字石崎	田畑宅地	
6	和田ヶ館	〃 字三城目	山林	
5	郷藏地館	〃 字陣ヶ岡	山林	
4	陣ヶ岡館	〃 字三城目	山林	
3	タカナシ館	三城目字本城館	山林	二二・五ヘクタール
2	袖ヶ館	矢吹字館山	山林	二六・一ヘクタール
1	袖ヶ館	矢吹字館山	山林	

古館(国神館)周辺の地名図 国神館跡参照のこと



袖 方 館 跡 (館山)

袖 方 館 跡

矢吹宇館山境内にある。別に狐ガ館または一水館ともいう。石川有光が前九年の役によって矢吹地方まで領有し、有光の四男福田源之允光孚が応徳二年(一〇八五)に矢吹を領して居住し、矢吹下野守基時と称した。以来石川家々臣としてその子孫が領し、天文二十年ころ(一五五二)館を築いたようである。最後の館主矢吹義聰の代、元亀二年(一五七一)九月伊達政宗に服属して館は没落した。矢吹氏はその後宮城県角田の臥牛館の石川家に仕えた。

矢吹家代々の墓



矢吹家代々の墓

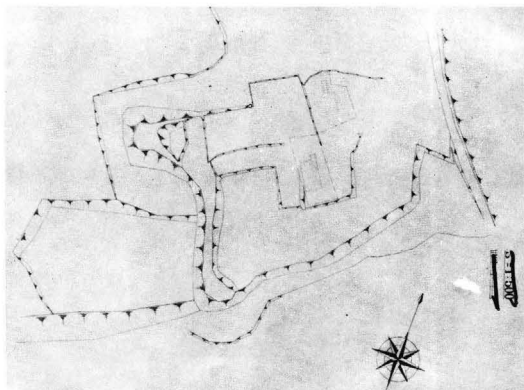
天正十八年(一五九〇)太閤秀吉より領地を没収され、領主石川昭光に従って宮城県角田に移った。以後矢吹家一族は角田の長泉寺墓地に葬られた。



国 神 館 跡 (国神)

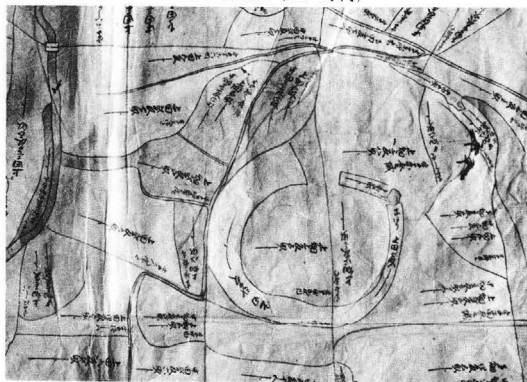
国 神 館 跡

原宿と平鉢の間にある。今では本丸跡に樹木があつて、館の名残りをとどめているに過ぎない。なんの記録もないので判然としないが、南都城・西都城・内屋敷・福寿庵・東都城という地名が残り、地続きに森郭・大熊森がある。この地は天平の昔から拓けたようだがはつきりしない。奥国年間(一三四〇―四五)ころから石川詮持(石川家一五代)の弟石川光定の子石川九郎光幹が国神館主となり、中畠家を創設した。中畠頼母光冬―中畠孫四



(国神館測量図)

国神館跡を示す中畑村絵図 (江戸時代)

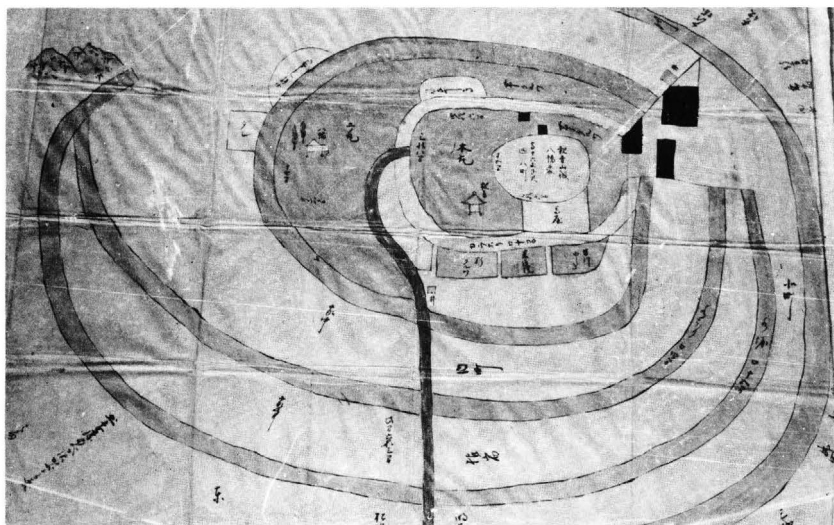


郎胤光―中畠但馬守中畠上野介晴常は白川家から養子に入った。晴常の長子の中畠上野介晴辰は根宿観音山を築き、おいおい家臣等を移転させはじめたが、天正初期(一五七三)ころ、八幡宮を最後に大熊森から根宿に移ったと思われる。遷宮は梅宮市之頭が相勤め、天正十一年(一五八三)二月十五日であったと、明和四年(一七六七)八月梅宮薩摩守の記録にある。



観音山館跡(根宿)

中畑字根宿地内にある。仁寿3年(853)慈覚大師作の観音座像を祀ったため観音山と伝えられ、豪族熊井の守本尊といわれているが、不詳である。中畠晴辰は天正11年(1583)2月15日を最後として、神社を館内に勧請し、一応は全部移転を完了した。そして、この年三城目のタカナシ館に移住するようである。理由は不明であるが、観音山館は弟の中畠大学介晴時に与えた。三城目のタカナシ館の中畠は石川昭光に仕え、弟の晴時は白川義親に仕えた。天正18年8月、白川義親は豊臣秀吉のために領地を没収され、同時に観音山館は廃止となった。



観音山館絵図面

(須賀川市相楽定邦蔵)

正平年間(1346~69), 石川安芸守有光の後裔石川九郎光幹より7代目の晴辰が、観音山館に館を構築した。天正年間(1573~90)八幡宮を移すなど、町割を行った当時の各名称・所在を示す絵図である。

(ただし、中畑新田が書かれているので慶長元年以降に書かれたものと思われる。)

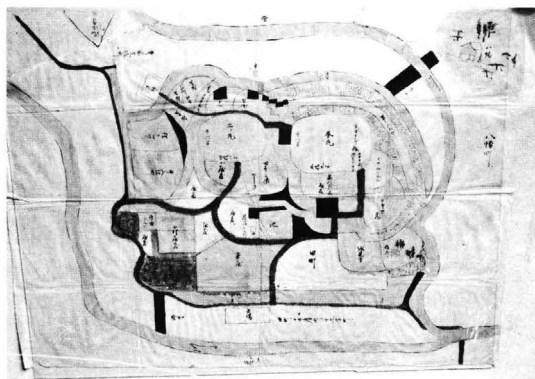


タカナシ館跡（本城館）

タカナシ館跡

三城目字本城館地内にある。タカナシの字は何故使ったのか判然としないが、おそらくは小鳥遊館ではなかったろうか。タカナシ館主の伊藤家は、伊藤大学又は藤大学といって、古い家柄であった神亀（七二四―二八）のころ、この地に土着したとすれば、石川家もなければ白川家もないことから、いずれにも仕えるはずがなく、当然独立してゐたことと思われる。このままの姿で後世館を築き相当の勢力を得て来たことすれば、永禄（一五五八―六九）元亀（一五七〇―七二）天正（一五七三―九一）のころになれば、勢力争いが起こることとは当然である。永禄年間になると、隣村中島村の国神館主中島上野介晴辰が子の中島幸右衛門晴友を連れ、家来一五、六人を引きつれ、タカナシ館主伊藤左馬介祐勝に館を引き渡すように交渉にあつた。伊藤祐勝は伊藤大学祐春の子で幼少であり、中島晴辰と戦いをする意志はなく、ついに奪われてしまつて、部落の一角に住いを構えることを許されたという。のちに三城目村の庄屋になつて勢力が大であつた。

中島晴辰は、古館にいた白川義親の家臣泉川大学介の申出によつて館内に家屋敷を与へ、自分の家臣としたようである。そして天正十一年（一五八三）末に、タカナシ館と三城目の地域を自分のものとし、中島親音山館中畑の地域と交換し、従来どおり石川昭光に仕え、子の幸右衛門晴友を石川に置き、石川昭光に仕えさせた。天正十八年八月石川昭光が豊臣秀吉に領地を没収されるに及び、タカナシ館も廃止され、晴辰は三城目に帰農すること考えず、相馬の旧縁のものをたよりに、行合の渡しの川原で農民や浪人ともに惨殺された。天正十八年八月十八日、晴辰の首は家来の赤塚掃部によつて三城目の墓地に葬られた。



タカナシ館跡絵図面

（須賀川市相楽定邦蔵）



伊藤家の守本尊といわれている
阿弥陀如来座像

（牡丹平 伊藤光之祐蔵）



物見館跡(丸の内)

物見館跡

大字須乗地内にある。白川義親の異母弟にあたる滑津村小針館主小針山城守小四郎頼広が物見館主を兼ねることになり、天正の初めごろに移ったが、小針館は家臣に任せたとようである。天正十六年（一五八八）頼広が没し、子の小針右京政頼が跡目を継いでいたが、天正十八年八月、白川義親が豊臣秀吉に城地没収されるに及び館を廃止し、政頼の子孫は中畑村の庄屋又は須乗村の庄屋となり、あるいは白河家に仕える武士となった。家臣の六〇人は思い思いの職についた。

物見館本丸内にある板碑供養塔

年記銘は不詳だが「**不**」の種子が見える。





古 館 跡



古 館 跡 出 土 礎 石 と み ら れ る。

古 館 跡

天文年間（一五三―一五四）より元龜年間（一五七〇―一七二）ころまで、泉川彈正（泉川大学介）が居た館である。中畠上野介晴辰が永禄年中（一五八―一六九）三城目タカナシ館に移るにもなつて、泉川は中畠上野介の臣となり、天正十六年（一五八八）没した。同十八年（一五九〇）太閤秀吉より領地を没収され、廃墟となる。



大 和 久 館 跡（川原）

天正7年（1579）のころ、多賀谷左兵衛尉が居住した。文禄年中（1592～95）に落城して廃墟となったと伝えられる。



郷蔵地館跡

三城目部落の西南約 100メートルの地にある。東南40メートル、南北50メートル。現在は民間の住宅地となっている。年代および館主は不詳。

小松館跡

三城目部落の東方約九〇メートルの地にある。永禄年中（一五五八〜六九）小松肥前守が居住し、元龜年間（一五七〇〜七二）白川家に住え、その後二階堂家に属した。天正十七年（一五八九）二階堂家が伊達政宗に滅ばされて後、廃墟となった。



和田ヶ館 三城目和田ヶ館山境内 年代及び館主は不詳。





陣ヶ岡館跡（陣ヶ岡）

三城目部落の北方約600メートルの地にある。高さ18メートル，周囲約900メートル。阿武隈川に臨み，風景はすばらしい。年代および館主は不詳。



沢尻館跡（沢尻）

三城目部落より約2.1キロメートルの地にある。年代および館主は不詳。



袴 館 跡
(大畑)

西袴館ともいわれる。天正8年(1580)のころ、大畠
大学が居住していたが、天正11年以降、観音山館の領地
に属するようになったといわれている。



堤 館 跡 (東堤)

薬師館ともいわれる。角田伊賀守が居住したと伝えられ
るが、詳細は明らかでない。現在は砂利採取によって崩壊
し、かつてのおもかげはない。



明新(観音山)館跡(明新下)
白滝城ともよばれる。年代および
館主、ともに不詳。

三、矢吹の板碑

頭部を三角形にして、横に二条の切り込み線を刻み、額部を少し厚目に、庇のように突き出した石板状の石塔である。まれに自然石をそのまま使っている場合もある。

板石の表面に仏の種子・佛像などを彫り、その下部あるいは傍に、年紀銘を刻んだものもあり、鎌倉時代・南北朝・室町時代にかけて、死者の追善供養、生前の逆修供養のために建立したものである。中世の政治・経済あるいは信仰・文化の繁栄した地域として考えられる阿武隈川流域には、板碑供養塔の分布が多いとされている。

矢吹では、矢吹地区の大和久地内、中畑地区の寺内・大畑地区内、三神地区の三城目・中野目地区に密集し、その他の地域に散在して、その数九〇基を数える。



景政寺仮名書供養塔
(三城目字上町)

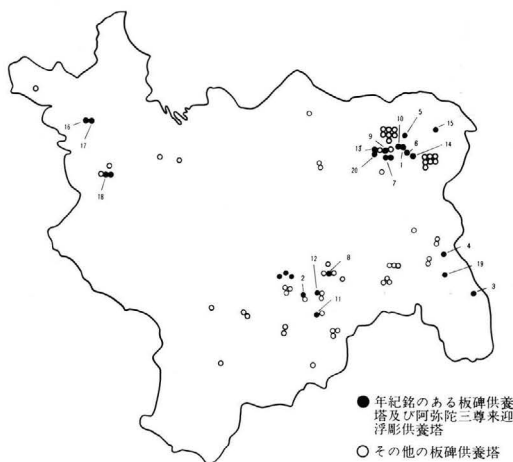
『集古十種』による模刻である。原碑はなく、原供養塔が確認されれば、県内最古のものに属する。嘉禎2年(1234)



「集古十種」にある景政寺仮名書供養塔

主なる板碑供養塔

主なる板碑供養塔所在地図

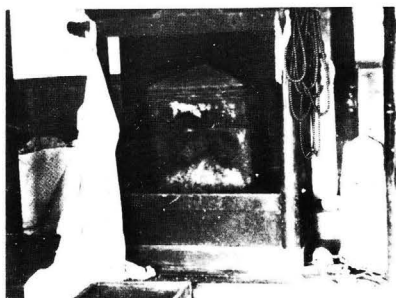


番号	名称	所在地	地目	備考
①	景政寺仮名書供養塔	三城目字上町	寺	嘉禎2年(1234)
②	寺内阿弥陀供養塔	中畑字寺内	寺	弘長元年(1261)
③	明新供養塔	明新	墓地	弘長4年(1265)
④	中野目阿弥陀供養塔	中野目字塚原	宅地	嘉元3年(1305)
⑤	三城目供養塔	三城目字下町	水田	延慶7年(1314)
⑥	行屋供養塔	三城目字下町	寺	正和5年(1312)
⑦	三城目供養塔	三城目字本城館	宅地	嘉禎2年(1327)
⑧	大畑供養塔	大畑字上ノ南	山林	元亨2年(1322)
⑨	三城目供養塔	三城目字本城館	畑	元徳3年(1331)
⑩	三城目供養塔	三城目字上町	寺	元弘元年(1331)
⑪	平林供養塔	中畑字松久保	道	延元4年(1339)
⑫	寺内供養塔	中畑字坂東	墓地	貞和2年(1346)
⑬	三城目供養塔	三城目字本城館	山林	応安7年(1374)
⑭	澄江寺阿弥陀供養塔	三城目字上町	寺	
⑮	川原阿弥陀供養塔	三城目字小松川原	水田	
⑯	山王阿弥陀供養塔	大和久字白田山	山林	
⑰	同上②	同上	山林	
⑱	阿弥陀湊供養塔	大和久字三峰森	寺	3基あり1基種子のみ
⑲	中野目阿弥陀供養塔	中野目字屋敷下	水田	
⑳	三城目供養塔	三城目字本城館	畑	応永33年(1426)

鎌倉時代の板碑

寺内阿弥陀堂供養塔

寺内阿弥陀堂の本尊である。記録によると、弘長元年八月二十二日は法印有海が遷化した日で、故人の名が判明したのはめずらしい。
弘長元年（一二六二）



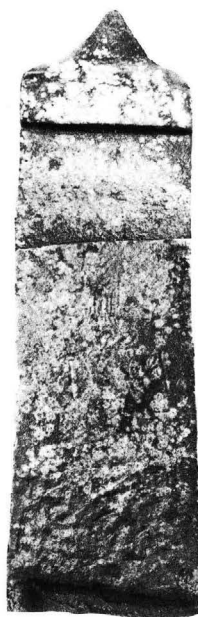
寺内供養塔



明新供養塔

明新供養塔

種子と弘長四年（一二六四）の年紀銘がある。



中野目供養塔

中央、阿弥陀如来像を線刻で描き、観世音と勢至菩薩の種子を円で囲み線刻してある。嘉元3年（1305）の年紀銘がある。

大畑供養塔



大畑供養塔

種子と元亨（一二三二）の年号があり、鎌倉時代末期のものである。

川原阿弥陀三尊来迎浮彫供养塔

(三城目字小松川原)



中野目阿弥陀三尊来迎浮彫供养塔

(中野目字屋敷下)



阿弥陀湯阿弥陀三尊来迎浮彫供养塔

(大和久字三峯森)

阿弥陀堂の本尊で同型のものが二基ある。
もう一基は、種子のみである。

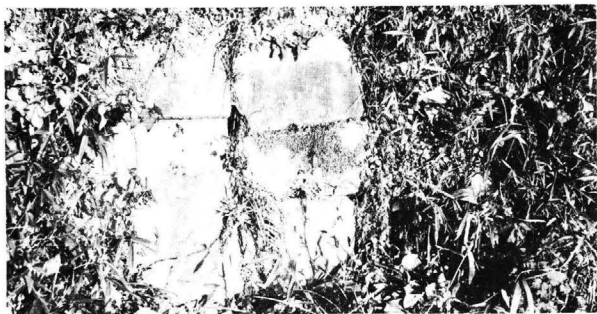


南北朝時代の板碑

三城目供養塔

(三城目字本城館)

タカナシ館跡のはば中央部に
ある。種子と元徳三年(一一三三
一)十月の北朝年紀銘がある。



平鉢供養塔

(中畑字松葉久保)

傍に複碑がある。種子と延元四年
(一一三九)南朝年紀銘がある。この
他に、延元年紀銘のものは、景政寺
(三城目)にもある。



室町時代の板碑

三城目供養塔

(三城目字本城館)

タカナシ館内南西側寄りにある。種子
と応永三十三年(一四二六)年紀銘のある
室町時代の供養塔である。



寺内供養塔(寺内字坂東)

種子と貞和2年(1346)北朝年紀名があ
る。この他寺内地内には、貞和6年北朝年
紀銘のもの2基、永和2年(1376)北朝年
紀銘1基がある。

四、伝説のなかの矢吹

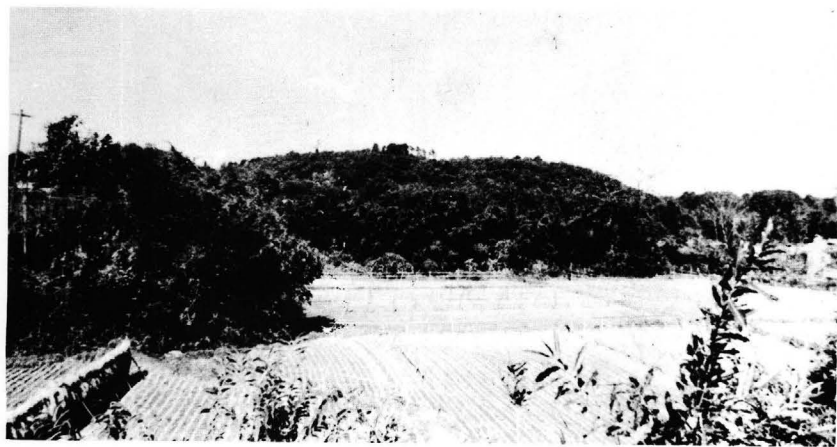
瀧 八 幡

隈戸川東沿岸岩瀬部に接する高地にあり、康平年間（一〇五八～六四）前九年の役に源義家が滞陣のとき建立した社である。その屋根を矢柄で葺いたので、『矢葺（矢吹）』と呼ばれるという。

また、隈戸川の岩壁に三十三体の観音が彫刻されてあるが、年代は明らかでない。その岩壁の上部に亀裂があつて、その間に雌雄の霊蛇が住んでいたのだ、村の人たちは大いに恐れたという。この瀧八幡の南方に細い流れの瀧があつた。馬の尻の尾のようなので、馬尾瀧と呼んだ。三十三観音の周辺には、西に陣場峯、旗鋒、南に陣場池などがあり、義家の滞陣の地名が多く残っている。



陣 場 ケ 峯（柿之内）





かぶと大明神（弥栄）

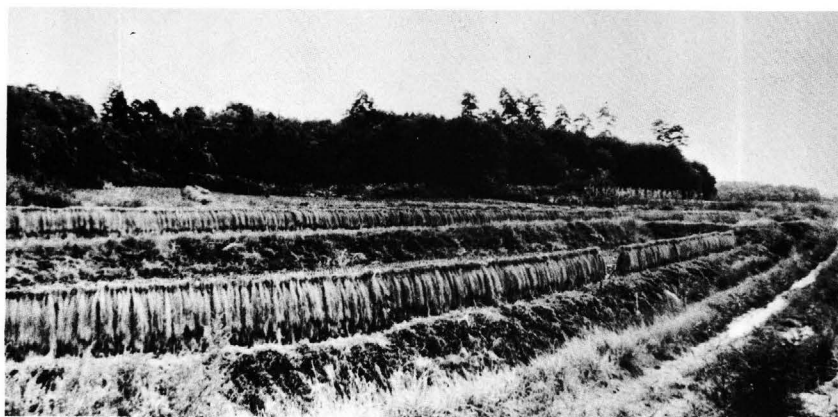
阿部ヶ沢の決戦で、源義家は安倍貞任を破って自分のかぶとを明神の祠に納め、今後の戦勝を祈願した。その後村の人々は、かぶと大明神と呼んで崇拝した。

明治になって、近津神社と呼ばれるようになったが、鎮守の大杉は一九四七年伐採された。四〇〇〜四五〇年の年輪であった。枯れはじめたので伐つたのだが、地ぐみが四五〇年が限度なのかも知れない。それから逆算すると、室町時代にも一回伐採したことが考えられる。今は入口の傘松だけが残って、昔をしのばせている。

白 幡 山（松倉）

白幡山は源氏軍の布陣の跡で、今の松倉部落共同墓地のうらの山一帯をいう。現在の松倉の宝蔵院は、白幡山の八幡寺を移したものである。





阿部ヶ沢と矢越山

永承六年（一〇五一）以後、陸奥の俘囚の長、安倍頼時、その子貞任、宗任一族討伐のため、九カ年の歳月を要したので、前九年の役といわれる。その間、安倍頼時は戦死するが、頼義は貞任に敗北し、清原武則に援軍を求めて、ようやく貞任を殺し、宗任を降して戦は終る。

阿部ヶ沢古戦場は、安倍軍と源氏軍の激突の地といわれる。源氏軍は金屋一帯（白幡山）に陣を取り、安倍軍は十日森（かぶと大明神）に陣した。両陣の矢合せにより、戦闘が開始されたが、源氏軍の弓勢強く、矢は遠く「矢越」まで届いたという。激闘の地は十日森の東南方阿部ヶ沢で、安倍軍が沢地に追い込まれて敗戦した。安倍軍の戦死者は、山野に累々と横たわり、それを源氏軍は「なでしが原」の一角にねんごろに葬った。今の屠胴塚である。



御霊社・景政寺

御霊社の祭神は村岡小五郎忠通朝臣である。朝臣は桓武天皇第四の皇子葛原親王の子孫といわれている。また、鎌倉権五郎景政の霊も祀っている。

永保二年（一〇八二）清原武衡・家衡が叛いたとき、源義家朝臣が勅を奉じて発向の際、忠通は副將軍として従い、子の景政も父とともに戦い、戦功があった。その後忠通は寛治三年（一〇八九）九月十九日、七十二歳で陣中に死んだ。

軍配団扇



黒骨扇



堀川天皇の時、忠通の軍功を賞して、その霊を鎌倉長尾郷に祀り、御霊宮の号を贈った。

景政は竹貫鎌田の城主となり、御霊宮を三城目の郷に移し、南台山に勧請したといわれる。康治二年（一一四三）九月十八日、景政は六十八才で卒し、その霊を御霊宮に祀った。鎌倉長尾郷にも合せ祀ったといわれる。九月十八、十九の両日を祭日とした。神宝として次のものが伝えられる。

- 一、軍配団扇 中に④の如き紋あり。文字、金。
- 一、黒骨扇 骨五本にて、長さ八寸。十一面観音の像を画く。
- 一、景政寺本尊十一面観音秘仏一

また、景政寺は御霊社の隣りにあって、天台宗永蔵寺の末寺である。山号は南台山、院号を東光院という。初め永福寺と名づけた。鎌倉権五郎景政の廟があるため、景政寺と改められた。東光院は景政寺の法号である。



明賀の松（明新）

後三年の役の折、源義家が藤田城（今の中野）に滞陣したときに、遠藤但馬というものが章毛の馬に「くつ」百足をつけて献上した。

義家凱陣するときに、沓打料として十町四方を但馬に与え、村の名を明賀と改めるようにいった。沓打の地名は現存する。その後、源頼朝が

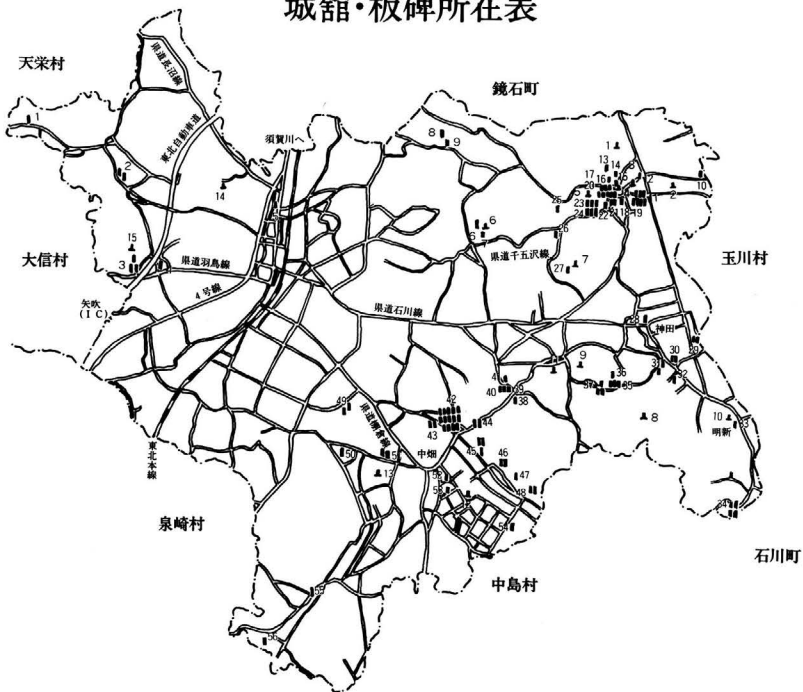
藤原征伐のときに、滞陣して阿武隈川のわたして歌をよんだ。

石川の館のふもと阿武隈に

明賀の松の影そうつろう

天正十八年（一五九〇）蒲生氏郷が支配するに及んで明岡村となった。

城館・板碑所在表

[illegible]